

夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness are round about me, and a judgment is made against me.
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about.
The hills melted like wax at the presence of the LORD, at the presence of the Lord of the whole earth.
The heavens declare his righteousness, and all the people see his glory.



オーガストオフィシャルハンドブック
『夜明け前より瑠璃色な』発売記念号

 **AUGUST**

まえがき

こんにちは。オーガストです。

長らくお待たせ致しました。やっと、新作『夜明け前より瑠璃色な』を皆様にお届けすることができました。

9月22日。ファンBOXから1年以上、ずうっと付き合ってきたキャラクター達を、いよいよ開発室より送り出す日。ほっとしつつも、少し寂しいような気もしました。

しかし、これまでの経験から、キャラクターへの愛着は発売後にどんどん深まっていきます。

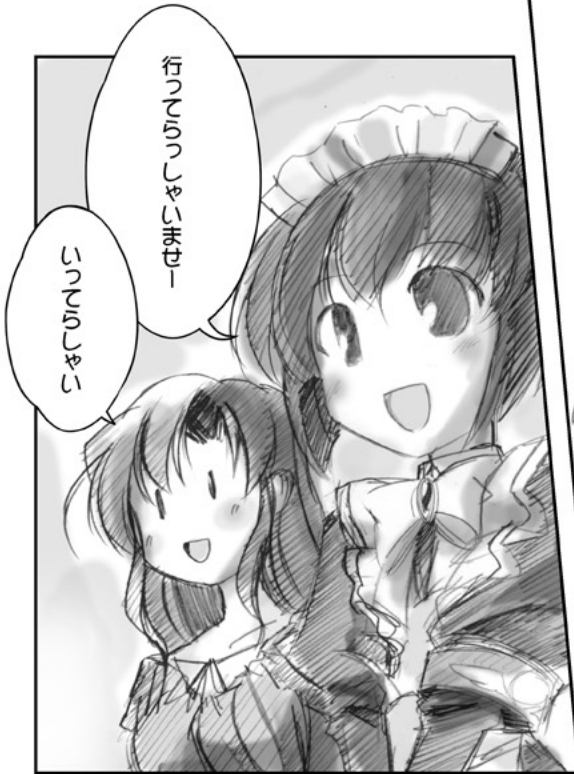
手のかかる娘たちでしたが、巣立って行ってしまうと、そのぶん余計に思い入れが強くなったりして。

願わくば、私たち同様に——またはそれ以上に、皆様に『夜明け前より瑠璃色な』のキャラクター達が思い入れを持って頂けますように。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2005年秋 オーガスト 拝





行くのよ行くのよ

さあ



それじゃ、
行ってらんわね。

さあ

学校へ行こう！
べっかんこう



学校、かあ……。

ミアちゃんも、
学校に行ってみたい？



それじゃ雰囲気だけでも
味わってみようかよ

はい

なに



え？

ほかーん



私の昔の制服なんだけど……
ちよつと大きかつたかしら

いざや
いざや

可愛い子は回き書てせ
可愛いおねえ

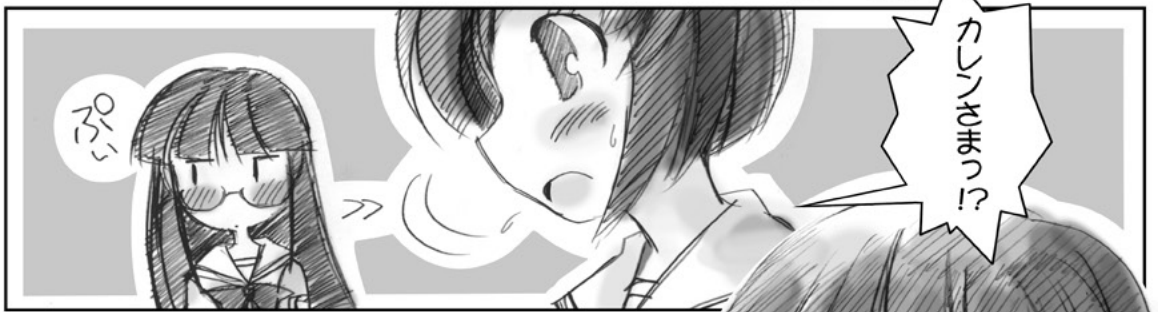
えん

「さやかさん」じゃありません。

あの、さやかさん……？

「さやか先生」です。







うん、それに姉さんも、
何かあったの？



あら、ミツ
今日は、機嫌ね。



ひ・み・つ♡

ねー、ミアちゃん♪



？

はい、さやが先生♡

えへへ



おしまい

〜瑠璃色シヨートストーリー〜

空を見上げて

内田ヒロユキ

梅雨前の澄みきった空に、綿のような雲がぼっこりと浮かんでいる。開け放たれた窓から流れ込んだ風が、髪を軽く撫でた。

「菜月、メシどうする？」

「進路相談で職員室に呼ばれてるの、ごめん」
申し訳なさそうに言って、菜月が席を立つ。

「フィーナは？」

「特に約束はないわ」

隣の席でフィーナが微笑む。

「一緒に学食でも行くか？」

「そうね……でも」

言葉を切って、フィーナは窓の外に広がる青空を見遣った。

「外で食べる？」

「いいかしら？」

「ああ、せっかく晴れてるし」

俺の言葉に、フィーナは優しく頷いた。

学食で買った昼食を手に、屋上へと続く階段を上る。

気がはやるのか、軽快な足取りで俺の数歩先

を進むフィーナ。

階段を上るたびに翻るスカートを、後ろ手に押さえる姿が可愛らしい。

「達哉、素晴らしい景色よ」

屋上への扉を開けたフィーナが、明るい声を上げる。

フィーナに遅れること数秒。

俺も屋上に到着した。

屋上からは、満弦ヶ崎の街が一望できる。

駅前の繁華街、商店街、月人居住区、物見の丘公園……

満弦ヶ崎湾の美しい弧と、先に続く広い外洋。水平線より上は抜けるような蒼穹。

「こんな景色を見ながらの昼食なんて、贅沢ね」

中天を見上げ、フィーナが晴れ晴れと言う。

「あそこのベンチに座ろっか」

「ええ」

屋上には、休憩用の簡素なベンチがいくつつか置かれている。

先客のいないものに近付く。

俺はポケットからハンカチを取り出し、ベンチに敷いた。

「どうぞ、姫様」

「もう、からかわないで」

苦笑して、フィーナがハンカチを返してくる。

「冗談だって」

「仕方の無いことを。……さあ、早く頂きましょう」

フィーナの言葉に、二人並んで腰を下ろす。

わずかに腕が触れ合い、彼女の体温が伝わってきた。

「じゃあ食べようか」

そう言って、俺は学食のビニール袋を開いた。



夜明け前の増城色

Copyright © 2013 by Shueisha Inc. All rights reserved.
A light novel published by Shueisha Inc. under the supervision of the editorial department of the magazine.
The title and cover art are the trademarks of the publisher.

しばらくして、お互いに昼食を終えた。
「いつもより美味しかった気がするわ」
「こんな日は、外で食べるに限るね」
お腹を休めながら、ぼんやりと空を眺める。
「以前にも言ったことがあるかしら。青空は月人の憧れなの」
「聞いたような気がする」
「不思議ね、空がこんな素敵な色だなんて」
「大気があるせいだね」
「もちろん、科学的な理由は分かっているのだけれど……それでも何か未知のものでできている気がするのよ、空は」
「月に持って帰ればいいんだけど」
「ふふふ……そうね」
空の先にある月を探すように、フィーナは空の彼方を見つめる。
横顔には、かすかに郷愁の色があった。
……。
彼女はいつか月に帰ってしまう。
当たり前のことなのに、なぜかチクリと胸を刺すものがあった。
「ふう」
「どうしたの、ため息をついて？」
フィーナと目が合った。
爽やかな風が吹きぬけ、彼女の美しい銀髪が舞う。
その美しさに思わず息を飲む。
「あ、いや……フィーナが来てから、もう一ヶ月にあるんだなって」
「気恥ずかしくなって目を逸らす」
「あっとい間ね」
「もう慣れた？」

「ええ、みんな良くしてくれるから。こうして一緒に食事をしてくれる達哉にも感謝しているわ」
「感謝されたくて一緒に食事してるわけじゃないよ」
「では、どういうつもりなのかしら？」
瞳の奥を覗き込むように、フィーナが俺を見る。
「え、えっと……」
答えに窮した俺を見て苦笑するフィーナ。
「からかうなよ」
「さっき、私のことをからかったでしょう？ そのお返しよ」
いたずらっぽい笑みを浮かべる。
「……悪かったよ、フィーナ」
言いながら、俺は背もたれに体を預ける。
見上げれば、真っ青なカンバスを綿のような雲がゆっくりと横切っていく。
「綿菓子、ね」
フィーナがポツリと言っ。
「え？」
「いいえ、何でもないわ。それより達哉」
フィーナが持っていた小さなトートバッグを開く。
「三時限目が調理実習だったのだけれど」
言いながら、クッキングペーパーの小さな包みを取り出す。
「クッキーを作ったの。良かったら、味を見てもらえるかしら？」
「いいの、俺が食べちゃって。フィーナのクッキーなら、欲しがら奴がたくさんいると思っけど？」
「良いからわざわざ出したのよ」
フィーナが俺の手に包みを置く。
「じゃあ、遠慮なく」

包みを解くと、プレーンなクッキーが5個現れた。
「パニラの甘い香りがふわりと漂う」
「頂きます」
一つを口に入れると、サクリとした歯ざわりの後、口の中一杯に甘みが広がった。
続けて、2つ、3つと食べる。
「どう、かしら？」
不安げな表情で、じっと俺を見るフィーナ。
「美味い」
俺の言葉にフィーナの表情が明るくなる。
「良かった。お料理はほんとにすることがないから不安だったの」
「それで、これだけのものが作れるなんてすごいよ」
残りのクッキーを平らげながら言う。
「ありがとう、達哉」
笑顔のフィーナ。
彼女のことだから、手を抜かず、真剣に取り組んだのだろう。
一生懸命に生地をかき混ぜる姿が目につかぶ。何事にも真摯に取り組むのは彼女の美点だ。なかなか真似できるものではない。
「クッキーも食べられたし、役得だったな」
「そんな大層なものではないわ」
「お姫様の手作りクッキーだよ。第一、美味しかったし」
言いながら目を閉じた。
目を瞑っていても、日差しの暖かさで太陽の位置が分かる。
「ふふっ、眠ってしまっわよ」
「大丈夫……」
大丈夫と言いつつ、じわじわと意識が遠のいていくのが分かる。
……。

夜明け前の溜壩色な

Copyright © 2010 Shueisha. All rights reserved.
A few pages before this and several pages after the end of the volume are
The full names are used as the copyright holder's name on the back cover.

……。
満腹感と心地よい日差し。

この環境に抗うのは難しい。

「どうしても眠いなら、眠ってもいいわ。時間までには起こすから」

フィーナの声が子守唄のように聞こえる。

「……じゃあ、ちよっとだけ」

「ええ、お休みなさい」
一緒にいる時に寝るなんて、失礼じゃないだろうか？

ふと、そう思ったが——
思っただけで、瞼を開くことはできなかった。

「ん……」

頬には柔らかな感触。

頬だけではない。

何か柔らかくて暖かいものに寄りかかっている気がする。

ゆっくりと目を開く。

……。

「おわ……」

右肩にフィーナの頭が乗っていた。

つまり、お互いに肩を寄せ合って眠っていたということだ。

これじゃ仲良しカップルになってしまふ。

「すう……すう……」

かすかな寝息が聞こえてくる。

「フィーナ」

小声で呼びかけるが、フィーナに起きる気配はない。

さっきは新しい生活にも慣れたと言っていたけど——

やっぱり疲れてるんだろつな。

せめて、予鈴が鳴るまではこのままにしてお

こう。

そう決めて、体の力を抜く。

……。

空には綿菓子のような雲。

ときおり流れる爽やかな風。

周囲には楽しそうに食事をする学生と……
見覚えのある顔。

……。

……。

……。

「菜月っ」

校舎への入り口で、菜月が硬直していた。

「や、ヤア、私、ナツキ」

もう、訳が分からなくなってる。

「ん、私……」

折り悪くフィーナが目を覚ます。

「あつ、えつ、達哉、私っ」

ぱっと体を離れたフィーナが、顔を真っ赤に染める。

「いや、あの……」

「ごめんなさい、本当に失礼なことをっ……」

「それはいいんだけど……あれ」

「……え？」

菜月の方を見るよう促す。

「な、菜月っ」

フィーナの顔が、菜月もかくやというほどの沸騰っぷりを見せる。

「菜月っ、これは、誤解で……」

「ご、ゴメンナサイ」

フィーナの声も届いていないのが、菜月は壊れた機械のような動きで校舎へと消えていった。

……。

……。

……。

抜けるように青い空の下、学生たちの視線が俺たちに突き刺さっていた。

……。



神原拓(以下神):こんばんは。神原です。

べっかんこう(以下べ):こんばんは。べっかんこうです。さてさて、ようやく発売ですね。

神:長かったですね。でも、過ぎ去るとあつと言う間違ったような気もしま……せん、やつぱり。

べ:もうよく覚えてないや(笑)……そうそう。お買い上げ頂いた皆様、ありがとうございます。

神:本当に、ありがとうございます。もし良ければ、アンケート葉書も送って下さいね。

べ:嬉しいご意見大募集です。

神:えっ、嬉しい方がいいんですか?

べ:いえいえ、そんなことは(笑) 温かい励ましのメッセージも大募集です。

神:葉書を読むと、へこんだり元気がなったり。

べ:半々くらいならバランスがとれるんですが……。

神:今はどっちが多いですか?

べ:それは秘密です。あ、でも、励ましのお便りでも「ここが良かった」って具体的に書いてあると嬉しいです。

神:それが意識して書いたところだったりすると、なおさらそうですよね。

べ:次回作の方向性を決めるのは君だ! みたいな?

神:そんな露骨に反映されることはありませんが、スタッフの意識には大なり小なり影響してそうです。

べ:ええと、話は変わるんですが、このハンドブックって初配布は10月でしたっけ?

神:ええ。多分10月10日です。

べ:じゃあ、もう全部クリアした方も多いでしょね。

神:多いでしょうけど……何度もテストプレイをしましたが、ボイスをちゃんと聞いていると、かなり時間が掛かります。CG統括の里見くんも、確か一回目は9時間くらいでしたし。

べ:休日とかに少しずつ進めてる方は終わってないかも?

神:ですね。

べ:でも、ボイスはちゃんと聞いた方が、何て言うかキャラへの感情移入度が上がりますよね。

神:それは確かに。できれば、全部聞いて頂けると嬉しいです。

べ:あと、例によっておまけもあるので、できればフルコンプしてほしいです~

神:おまけと言えば、おまけのためだけに、最後の方で慌てて作った立ち絵もありましたね。

べ:あの頃は時間が無くて大変でした……。

神:そうでしたね……(遠い目)

べ:体調を崩すわけにはいかないので、マスターアップ直前には野菜ジュースをたくさん飲みましたよ。

神:手作り?

べ:時間が無かつたって言ってるじゃないですか(笑)

スタッフ対談 第11回 べっかんこう & 神原拓



2005.9.26 PM6:40 社内にて

あとがき

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

『夜明け前より瑠璃色な』をお買い上げ頂いた皆様、本当にありがとうございました。
まだの方も、よろしければ是非。

この小冊子は『夜明け前より瑠璃色な』の発売後に制作していますが、
開発室には、早くもプレイされた方からの葉書が沢山届き始めました。

各パートの担当者が、その葉書を見て喜んだり落ち込んだり
参考にしたりやる気になったりしていますので、
もしよろしければ、ご送付頂ければと思います。
できればオールクリアしてから、
そのご感想をご記入頂ければ幸いです。

それでは、今回はこの辺で。

今後とも、オーガストを
よろしくお願い致します。

2005年秋
オーガストスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
『夜明け前より瑠璃色な』発売記念号

最新情報満載！オーガストオフィシャルHPに
ぜひお越し下さい！

<http://august-soft.com/>



夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness are round about him, but lightnings are his banners,
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about,
The hills melted like wax at the presence of the LORD, at the presence of the LORD of the whole earth.
The heavens declare his righteousness, and all the people see his glory.



オーガストオフィシャルハンドブック
『夜明け前より瑠璃色な』発売記念号



(C) 2005 AUGUST ALL RIGHTS RESERVED.